



常廣 珠実 (つねひろたまみ) 別所中 2年生

図 書：羊と鋼の森

私は友人からの紹介で「羊と鋼の森」を読んだ。その友人は私と同様、ピアノが好きでこの本をととても気に入っているという。

「羊と鋼の森」は十七歳の少年がピアノの調律師を目指す話だ。学校の体育館に来る調律師の案内を頼まれた少年は、静かで、あたたかな、深さを含んだピアノの音色を聴いた。そして、生まれて初めてピアノというものを意識した。私は、直感が大切だと思った。少年が具体的にどんなことを感じたのかはわからないが、彼がこの直感を大切にしたらこそ、自分の将来が開けたのだと思う。少年は、調律師になるために、こつこつ努力した。正しい音はないとわかっていたが、理想の音を追求した。

「明るく静かに澄んで懐かしい。甘えているようでありながら、きびしく深いものを湛えている。夢のように美しいが現実のようにたしかな音。」私は、自分の理想の音を追求するため、こつこつ努力する少年の姿に感動した。そして、鬱蒼とした森へ足を踏み入れてしまった怖さを感じながらも、あきらめず、調律師という道が間違っていないと信じて進んでいく少年の意思が本当に素晴らしいと思った。

「音楽は人生を楽しむためのものだ。決して誰かと競うようなものじゃない。競ったとしても、勝負はあらかじめ決まっている。楽しんだものの勝ちだ。」

私はこの言葉がとても心に残った。楽しんだものが勝ちというのは、音楽だけでなく、この世界に存在するすべての物事に共通するのではないだろうか。例えば幼稚園の運動会。私はパラバルーンという種目を行ったことを鮮明に覚えている。十年も前のことをなぜ覚えているのだろうか。それは、楽しかったからだと思う。楽しくない運動会が記憶に残ることはないだろう。去年の合唱コンクールでは、私は楽しむことを目標とした。もちろん、練習などすべてがうまくいくことはなかったが、一瞬一瞬を全力で楽しんだ。優勝することはできなかったけれど、全力で楽しんだ分、悔しさはなかった。楽しくない人生を送れば、後に後悔するだろう。

もう一つ心に残ったことがある。少年が調律がうまくいかなかったときに、

長年調律をしている先輩に、

「調律に一番必要なものって何だと思いますか」

という質問をした。その答えは、「根気」「度胸」「あきらめ」だった。これも、すべての物事に共通すると思う。何度だめでも必死に挑戦する根気。何を言われても自分を信じ、プレッシャーなどにも負けない度胸。一方で、一生懸命取り組んでも、完璧には届かないとわかっているのなら、見切りをつけてあきらめること。あきらめるといっても、望みを捨てるのではなく、気持ちを切り替えるということだ。この三つはとても大切だと思った。

私はこの本で学んだことを、これからの人生に生かしていきたいと思っている。

一つ目。頼まれたことは引き受けること。少年のように、頼まれたことを通して、将来が開けるような出会いがあるかもしれない。引き受けて無駄になることはないだろうと感じた。

二つ目。興味を持ったことは、興味を持ち続けること。興味を持てば、新しい発見や挑戦をすることができるだろう。また、興味を持ったことがきっかけに、自分の将来が変わるかもしれない。

三つ目。こつこつ努力すること。どんなに気が遠くなっても、焦ってしまえば、かえってそれが遠回りになってしまうかもしれない。

四つ目。今までの経験で役に立たないことはないということ。どんなに大変なことも、それを乗り越えれば必ず強くなれるだろう。

五つ目。時にはあきらめること、つまり、気持ちを切り替えることが大切だということ。必死で頑張ることも、すごく大切なことだが、完璧を求めていつまでもあきらめないのは、何より大変で、もっと気が遠くなってしまうだろう。

調律師を目指した少年のように、こつこつ努力し、自分で選んだ道を何があっても進んでいった人ほど、素晴らしい調律師になれるのだと思った。私も、将来の目標に向けて、少年のようにこつこつ努力し、自分で自分の道を選び、進んでいけるような人になりたいと、この本を読んで強く思った。